40

サンエスダイカスト 株式会社

ダイカスト成型で
自動車衝突予防システムや医療に挑戦

一貫生産が強み

この数年で
設備投資を強化

数値の測定で保証を手厚く

事業内容 鋳造の専業メーカーから転換

平成１２年に「サンエスダイカスト」は、大阪市で「ヨシダダイカスト」として創業した。創業からまもなく財務体質が悪化し、その救済措置として大阪府八尾市に本社を持つ木下アルミ（株）が旧ヨシダダイカストを引き受けた。これを契機に木下アルミ（株）の社長で現在の「サンエスダイカスト」の社長を務める木下正夫社長の息子の木下忠紀現専務が、「サンエスダイカスト」に入社。実質的な経営にタッチすることになった。まず、事業を行う上での損益分岐点はどこなのかを洗い出し、課題をクリアすることにした。この努力が実り、平成13年8月頃に黒字化に成功した。

平成15年4月に大阪府八尾市の現在地に移転し、同8月に「サンエスダイカスト」に社名を変更した。当初は鋳造のみだったが、現在は金型の生産から仕上げまで一貫して手がけている。また自動車関連企業との取引が創業時は中心だったが今では、農機具、自動車、事務器具と幅広い業種と取引している。

補助事業 ミリ波レーダーシャーシの生産に着手

平成２０年のリーマンショックの影響で売り上げが激減。さらに当時主力としていた自動車向けやカーナビ向け部品の生産が九州や海外などへと移管。ピーク時に4億円だった売上高は、平成21年に1億6，０００万円までに減少した。平成２１年に売上高が減少して以降、なんとか黒字化させた。そこでの経験もあり、従来と異なった仕事を受注することで成長の活路を見いだすことにした。

中小企業庁の「ものづくり補助金」の採択を受けCNC（コンピュータ数値制御）加工機と3次元測定器を1台ずつ導入。計1，７００万円の投資となった。新設備の稼働で、自動車衝突予防システムのセンサー部品「ミリ波レーダー」のシャーシを生産するねらいがあった。自動車分野で衝突予防システムの需要が大幅に伸びるとの予測を立てていた。中でもミリ波レーダーは、悪天候に強いなどの特性がある。生産性が高い設備の導入に踏み切ることにした。

具体的成果 1日で仕事量が約２５％向上

「ものづくり補助金」の採択を受け、CNC工作機は計２台となっていた。一方の設備で加工している間、もう一方の設備ではほかの加工対象物をセットする。それを繰り返すことで加工対象物をセットする待ち時間が抑えられた。増設による生産効率の最適化で、１日で約２５％の仕事量の差が生じてくる。「それが利益と競争力の差になってくる」と木下専務は強調する。取引先からの要望に適切にこたえ、増産体制に柔軟に対応できる素地は整っていた。

ミリ波レーダーカバーは当初、月２００個程度の受注だったが現在は月６万個を取引先に納入している。「受注当時から、衝突予防センサーは数量で大きく化けると言われていた」と木下専務は振り返る。また、高精度の寸法が要求される製品の営業も、迅速な加工ができる設備と３次元測定器による性能保証を揃えて提出できるため自信を持ってできるようになった。新設備の導入により仕事の幅を広げたほか、生産性を向上して大型受注の獲得につなげている。

今後の戦略 自動車分野を再び主力に

「もう一度、自動車分野に力を入れたい」と木下専務は語る。現在は農機具、自動車、事務機器の計３分野に製品を供給する。だが自動車衝突予防システムの普及が、同社のポートフォリオをかつてのような形態に変えていく可能性がある。自動車衝突予防システムのバリエーションも、今後幅広くなっていくとみられるためだ。自動車分野を強化するほか、新たな事業として医療分野も視野に入れている。医療分野に取り組む中小企業は昨今増えており、その流れの中で「サンエスダイカスト」も存在感を出そうとしている。平成２８年９月に最新鋭のCNC加工とワンショット3次元形状測定器を計1台ずつ導入した。「ものづくり補助金」を活用して3次元測定器を導入していたが、そのプラスの効果を実感して保証部分をさらに厚くすることにした。

従来は人の手を使って計測していたが、新しい計測器は画像処理を採用した。公差が少なくなり、より精度が高い保証を提案できる。医療分野において、製品のバリはあってはならないもの。バリの有無をしっかり計測するかどうかで、出荷できる製品が異なってくる。今後も、設備を生かした一貫生産と確固とした保証で、品質とコスト競争力がある製品を生み出していく。

サンエスダイカスト 株式会社

代表取締役専務　木下 忠紀

〒581-0053　大阪府八尾市竹渕東2−115

TEL. 06−6704−9991

FAX. 06−6704−9992

資本金／10，000千円

従業員／24名

短納期　企画力　小ロットOK　量産OK　海外対応　試作OK　連携力

小規模ながらも、一貫生産と充実した設備で競争力ある製品を提案

代表取締役専務 木下 忠紀

当社のような小規模な企業で、ダイカスト成型から機械加工、3次元測定器によるデータ処理と一貫して手がけるのは少ないと自負しています。また、当社が出資する中国の金型製作工場や大型設備を駆使して、コスト競争力がある製品を提案します。

http://www.3s-dc.co.jp/

取材を終えて

自動車産業への思い入れ感じる

財務体質の悪化によるM＆Aというマイナスからスタートした。赤字状態の中では、仕事に対するモチベーションはなかなかあがらないのが通常。そこであきらめることなく仕分けをきっちりすることで、ダイヤの原石となるものを拾い出して磨くことにした。祖業で苦労したはずだが原点である自動車関連の仕事に力を入れていきたいという言葉に、驚きとともに自動車産業に対する思い入れの深さを感じた。